

J O F I 東京通信

第5号暫定版 平成29年1月15日発行

<http://www.jofi-tokyo.org/>

東京都釣りインストラクター連絡機会報誌

目次

今年度を振り返って	鈴木 伸一 会長…	1
北区民ハゼ釣り教室	勝島 諒典…	2
釣り三昧は甘かった	遠藤 実之…	2
磯釣りに魅せられて	阿部 敏明…	3
キャッチ&リリース	新井 勝之…	3
イエローストンのオオカミ	石井 利明…	4
フライ・フィッシング世界選手権大会の紹介	小松澤 誠一…	5
付知川鮎旅	藤山 童溪…	6
ビワマス	鈴木 伸一…	8
釣りの潮目	四条 徳明…	9
釣りのブログ	泉澤 和行…	10
お宝コーナー…		11
2016年度活動実績…		13

今年度を振り返って

鈴木 伸一 会長

4月24日(日)に開催された平成28年度定期総会で会長を任せられ、年末で早8ヶ月が過ぎようとしている。この間、JOFI東京の発展にご尽力されてきた勝島氏、遠藤氏の歴代会長の路線を踏襲すべく、皆様のご協力の下、ただただ我武者羅に突っ走ってきたのが精一杯といったところが正直なところである。

1月に開催されるジャパンフィッシングショウ2017におけるマスのエサ釣り指導が終了すれば、JOFI東京としての公式イベントは1ラウンドすべてを経験することになり、その後は今までの経験を生かし、幾ばかりは自分のカラーも出していきたいと考えている。

釣りインストラクターの活動は決して個人のみでできるようなものではなく、メンバがそれぞれ協力し合ってはじめて一つのイベントが遂行できるといった類のものと思っている。それには、各メンバは自分が興味のあるイベントに対しては企画の段階から参加できるような環境作りが必要なのであると感じている。そういった意味で、今年度は復活させた企画・事業部の下に様々なWorking Groupを設けたつもりであったが、残念ながら力及ばず機能させることができなかった。

次年度は是非とも、秋山地区豊かな川づくり事業、若洲海浜公園釣り場における新事業、クリーンナップ活動の発展形、釣りインストラクターの行動指針など、できることから早急にWorking Groupを機能させるつもりである。

また、JOFI東京に入会して間もない方から、各イベントの参加募集の際、自分がそのイベントに参加できるかどうかの判断材料(イベントのタイムスケジュール、指導の具体的内容、持ち物、服装、主催側が提供する装備など)が提示されていない旨の指摘を受けた。言われてみれば極当たり前のことであって、そんなこともイベント参加への障壁となっていたのかと反省しきりである。

それに、人は毎年年を取るもので、新しいメンバが入会しない限りJOFI東京も高齢化が進むばかりである。当面は首都圏JOFI間の協力体制を強化することで凌いでいるが、それも限界があるので対策を打っていかねばと思っている。

その他にも反省材料や今後考えていかねばならないことも多々あるようであるが、釣りは楽しくなければ釣りでないというのが私の釣りに対する思いである。とにかく、皆様方が楽しく釣りの指導ができるように、体制作り、イベントの企画なども含めメンバ参加型の開けたJOFI東京目指していくつもりなのでご協力の程どうぞよろしくお願いいたします。

北区民ハゼ釣り教室

勝島 諒典

8月7日(日) 葛西臨海公園なぎさにおいて北区教育委員会・北区釣魚連合会共催で第14回北区民ハゼ釣り教室が開催された。

参加者子供45人・大人42人・指導員20名(私を含めて釣りインストラクター参加者は6名)のもと、8時半に集合し、竿・仕掛け・えさを各人に配り指導員より釣り方及び注意事項等の説明後9時より釣り開始となる。

各人思い思いの場所にて釣り始めるとなるや各所より歓声があがり、その都度指導員が駆けつけて釣れたハゼを外したり、餌(青いそめ)を付け替える、切れた鉤の交換と、大忙しの釣果はすそで11匹トップは45匹と皆さん大喜びで11時に納竿となりました。

12時より子供への抽選会で当たった賞品でまたまた大喜び。酷暑の中の釣教室でしたが、冷水・塩あめ・仮設テント等の準備万端により一人の事故もなく、連合会長の挨拶後無事解散となりました。

釣り三味は甘かった

遠藤 実

昨年3月で会長職を新会長に委ね、時間的にも余裕が出来て、又、釣りを楽しめると思ったのは甘かった。

JOFIの方は後任の皆さんが、頑張っているので安心してはいますが、地元の高齢者クラブや、スポーツサークルの指導など、以前より時間を取られる始末。おまけに82歳にもなると、無理の出来ない身体になりました。JOFIのイベントには出来る限り参加したいと思っています。

2020年には東京オリムピックも開催されます。元気でいれば86歳、何とか頑張ってみようと思っておりますがどうなりますか。

先日池袋のデパートに買い物に出かけ、魚売り場で普段お目にかかれない「クエ」が有りました。我々はモロコと呼んでいますが、15cm角の切り身が¥5,000。昔何度も伊豆七島やベヨネーズ列岩、スミス島などへ、クエを始め、カンパチ、ヒラマサ等の巨大魚を釣りに出かけたことを思い出します。贅沢な釣りをしていたもんだと今更ながら思います。これからは歳相応の釣りをとしたいと思います。



実は27日高校生の孫を連れて外房に、28年の納竿にヒラメ釣りの予定でしたが、生憎の時化のため中止になりました。残念ですが孫の初めての釣りなので、条件の良い状態で釣りに興味を持たせたいと思っています。父も海釣りが大好きで、小型船を持つ程でした。そして子も然り、孫、曾孫とDNAは続いています。ルールやマナーを守り、将来釣り指導員として貢献してくれればと願っています。

磯釣りに魅せられて

阿部 敏明

弧島(岩礁)専門に巨大魚を狙って日本各地だけでなく海外まで足を運んで50年・良くも無事に生きていたと思うがまだまだ現役を引退するつもりは毛頭ない。何故なら磯釣りは体力・気力の勝負だと思いますのでまだまだ私は自信があるからです。

大別して釣法には上物狙い、底物狙いになります。上物は対象魚が生餌を泳がせて青物狙い(ヒラマサ、カンパチ、ヒラアジ)ドラックをフルに活用しての持久戦でのやり取りがたまらない。水面を横泳ぎする青色の魚体を目にすると勝利感が満喫。

底物はクエ狙いが主流。石鯛や石垣鯛など石物は論外である。坐っての力比べで主導権を得ない根に入られて道糸を切らなければならない。相手が水面に浮かばあっさり取込みができる。そのとき頭をよぎるのが価値観Kg1万円の計算。

オオカミ（大型のシマアジ）釣りも難しいが魅力的だ。上物と底物釣りの両方使い分けしないとイケない

余り糸を出すと海底をジグザグ走るので根がかりをしてしまう。目が良いので太い仕掛けには口にしない

食わせるには身餌をつけて磯際から落とし込みコマセ投入して濁らせてだますテクニックも効果的。

外道も大もので100Kgを軽くオーバーすると（サメ、エイ、ナマズ、イソマグロ）ガイドが全てすっ飛んだり、引きがあまりにも強烈でドラッグを目いっぱい締めても逆転してリールから白い煙が出てきて使えなくなってしまうこともあった。

釣り場である岩礁に乗るには日本では渡船（チャカ）を主にチャーター方式で利用。小笠原諸島では夜釣りが主体なので滞在となり船から三食届けてもらう。釣った魚はロープを使って船に回収していただく。

海外では通訳を同行しヘリとキャンピングカーで狙う釣り場を開拓しながら攻める。

本当に磯釣りにはロマンがある。繊細な釣りが苦手なので私にはとてもあっている釣りだと思う。

キャッチ&リリース

新井 勝之

今年のフライ・フィッシング釣行は、群馬県内のキャッチ&リリース区間が設けられている河川を数回訪れて楽しい思い出を残すことが出来ました。

キャッチ&リリース区間は近年、増えていますが、不評で止めている所も 多いようです。原因としては 釣り人のマナー不足で、釣れないと文句を言うし、釣り取り区間と料金が同じなのは不公平感がある様に思われてしまう。

知ってか知らずか 釣り取りしていく人や時間外に密漁していく者やひどい人は監視員を脅して警察沙汰を起こす連中など、かなり釣り人に問題有り、漁協も対応に苦慮しているのが現状みたいです。

最近のキャッチ&リリース区間では大型のニジマスを中心に訪流して釣り味を楽しんでもらう事と、年間ランキング賞やシーズン中に釣り大会やプロの講習などのイベントを行い、リピーターを増や

す努力をしているところもあります、釣り人は我が儘なので満足させるのは難問です！

溪流での釣り師全般に言えるのですが、近年、漁協の管理する釣り場では成魚放流中心により、魚体の質の悪い物も含まれるし、養魚場育ちの魚は人への警戒心が少ないのですぐに釣られてしまうので、漁協の管轄外での天然魚を求めて山奥等に入り込む釣り師が増えています。

私の釣り仲間でも、車止めから数時間歩く釣行の話をよく聞くようになりました。また、行きやすくしているのが、登山ブームにより、ルート of 整備やアクセスが良くなっている事やガイド本やインターネットでの情報収集が簡単に出来る事があげられます。

漁協の別の取り組みとして、釣り人に 満足感を与えるために 天然魚に近い質の物を 放流している、釣り人の立場で考慮している事で、人気を高めています。

鈴木会長が JOFI 東京としてのプロジェクト化に取り組んでいる秋山川漁協の「秋山川再生プロジェクト」が有り、私も9月の会合に初参加しました。その中で、漁協役員 石井氏（JOFI 東京メンバでもある）の提案に「放流に頼らない自立的な釣り場管理」を最終目的にしたいとの提案が有りましたが、私もこの案には大いに賛成できますが、多くの難問も含まれているので、実現化するには多くの時間と労力が必要に思われます。

その中で、釣り人に関する問題として挙げられたマナーの向上が有りますが釣りインストラクターは指導的立場にいる以上真摯に取り組まなければならない事項ですが、海水面と内水面別の資格を持ち、釣り物や釣り方は多種に亘り、その中で、魚のサイズや匹数制限を設けるのは、役員会等でも議題に上がりますが、そこから先への進展が見られません。

私としては、会長も含めて内水面の人数も増えたので、溪流魚を対象として自主規制（最小サイズと匹数）を討議して推進を図りたいと思います。



群馬県内のキャチ&リリース区間での尺ヤマメ



同じ場所での泣き尺の岩魚

地元モンタナ大学は、オオカミ再導入で観光客が増え、年間約 30 億円の経済効果があったとの試算を出している。

絶滅危惧種の指定を外れたとはいえ、数を適度に維持しようと思えば、手間はかかる。しかも半永久に続けなくてはならない。

日本にもオオカミ再導入の構想があると聞く。忘れてならないのは、将来にわたってオオカミと付き合う覚悟とその財政的な裏打ちがあるのかということだ。(抜粋終了)

このオオカミを放せた背景には、記事にあるように国立公園の収入があります。食べられた家畜は保証されますが、それでも反対はあると現地では聞きました。

その反対に対抗できるほど野外のレクリエーションは巨大産業なのです。

米国内務省が出している釣りと狩猟と野性動物観察の全国調査の 2011 年結果は以下の通りでした。
(https://wsfrprograms.fws.gov/subpages/nationalsurvey/national_survey.htm) を参照してください。

Hunters, anglers and wildlife watchers spent \$145.0 billion on wildlife-related recreation in 2011.

全米で野外のレクリエーションに使われる費用 (\$145.0 billion) は 110 円換算で 16 兆円です。

記事にもあるように、永続性を要求される活動には財政の裏づけが必要です。

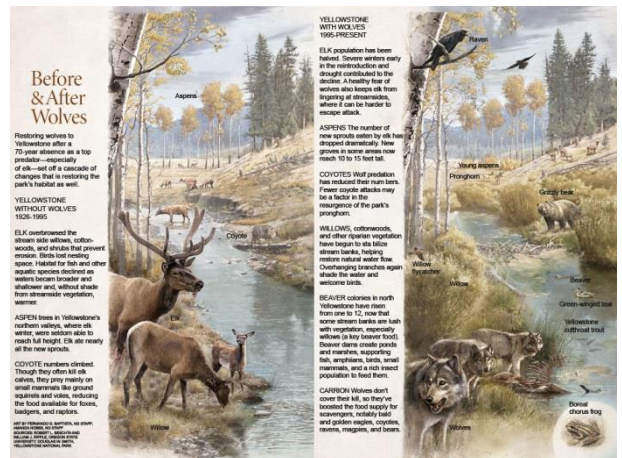
イエローストンのオオカミ

石井 利明

私は 99 年にアメリカのイエローストン国立公園に行ったことがあります。その際に、公園の管理事務所のパークレンジャーから 95 年からオオカミを再導入しているという話を聞いたので、現在はどうかになっているのかと思って調べてみました。

ちょっと古いですが 2012 年 12 月 5 日の夕刊 (朝日デジタル) の記事を以下に抜粋してみます。

<オオカミの再導入> イエローストン国立公園周辺にはかつて多くのオオカミがいたが、駆除や捕獲で 1926 年を最後に確認できなくなり、73 年に「絶滅危惧種」に指定された。オオカミの再導入には反対や慎重な意見もあったが、生態系回復のため、95 年と 96 年にカナダから連れてきた計 66 頭(うち国立公園内に 31 頭) が放された。



フライ・フィッシング世界選手権大会の紹介

小松澤 誠一

唐突ですが、フライ・フィッシングには世界選手権大会があります。

長年フライ・フィッシングを楽しんでいる方でもその存在を知らないと言う方も少なくないのではないのでしょうか？ この機会をお借りしまして日本ではあまりメジャーではないフライ・フィッシングの競技大会についてご紹介をさせて頂きたいと思えます。

フライ・フィッシング世界選手権大会(WFFC: World Fly Fishing Championships の略)は、サンマリノ共和国に設立されたフィップスモッシュ(FIPS-Mouche: Federation International de Peche Sportive Mouche の略)という組織が元となり、その組織に加盟する各国の釣り組織が年に1回開催している一大イベントです。

現在 FIPS-Mouche の加盟国は 37 カ国で、毎年、30 カ国、150 人近くの選手が WFFC に参加しています。WFFC の歴史は古く、1981 年にルクセンブルグで第 1 回大会が開催され、2016 年のアメリカ大会で 36 回を数えています。

FIPS-Mouche の定めるスポーツフライフィッシング競技大会とは「経済的な報酬無しで慣習的なフライフィッシングの道具を使った競技大会」であり、賞金の獲得を争うことを目的とした大会とは異なります。

釣りの技術の向上と参加国同士の国際友好を目的とした、さながらオリンピックのようなイベントとなっています。

FIPS-Mouche の定める WFFC は、基本的に以下のような日程で開催されます。

- ・1 日目: 参加登録・開会式
- ・2~3 日目: 公式練習
- ・4~6 日目: 競技大会
- ・7 日目: 環境保全シンポジウム・表彰式・閉会式

大雑把ではありますが、競技大会の進め方や順位の決め方を説明します。WFFC は参加国対抗のチーム戦です。それぞれのチームは 5 人の選手によって構成され、各チームの選手一人ひとりがそれぞれ 5 つのグループに分けられます。同じグループになった各チームの選手が、釣果によってグループ内での順位を競い合い、その順位がその選手の得点(Placing Point: プレーシングポイントと呼ばれている)となります。

そのプレーシングポイントをチーム毎に合計し、得点の一番少ないチームが優勝となります。また、この得点は選手個人にも同様に適用され、合計した得点の一番少ない選手が個人優勝となります。表彰はオリンピックと同様で、上位 3 位までのチームと選手に、金・銀・銅のメダルが授与されます。

大会の主催国は 5 箇所の釣り場(Sector: セクターと言う)を、淡水の川、もしくは湖沼から選びます。

各セクターは、参加するチーム数と同数に区画割り(Beat: ビートと言う)されます。1 つのビートは、川の場合は 200m 以上、湖沼の場合は 100m 以上となっており、釣り方には、岸から、もしくはボートからの釣りがあります。



ボート釣りではビートを区切らないことがあり、その場合、選手同士はボートを 50m 以上離さなければなりません。以上の内容は開催国によって選択され、FIPS-Mouche の審査によって承認されます。

競技大会の期間は 3 日間ですが、それぞれ午前と午後の 6 つの時間帯(Session: セッションと言う)に分けられます。各セッションの時間はそれぞれ 3 時間で、各選手は 5 つの競技セッションと 1 つの休憩セッションによって競技を行います。各選手はセッション毎にそれぞれのセクターで 1 回ずつ釣りをする訳ですが、セクターを釣る順番、各セクターのどのビートで釣るのかは抽選によって決められます。

道具に関する主要なルールを以下に抜粋します。(2016 年大会時点)

- ・フライ用のロッド、リール、ラインを使用すること
- ・ロッドの長さは 12ft (366cm) 以下
- ・フライ・ラインは 0.22inch (0.55mm) 以上の太さで、長さが 22m 以上
- ・ラインディングネットは 48inch (144cm) 以下
- ・ティペットを含むリーダーの長さはロッド 2 本分以下
- ・同時に付けられるフライの数は 3 個以下で、それぞれのフライ同士の間隔は 50cm 以上
- ・バーブレスフック以外の使用禁止
- ・シューティングヘッド、浮き、重りの使用禁止
- ・フェルトソールブーツの使用禁止
- ・ボート釣り時の救命胴衣の着用義務

その他にも、フック、ビーズヘッドの大きさ、ラインシステム、フライマテリアルの使用制限などの細かいルールがありますが、詳細は割愛させて頂きます。

また、道具に関するルールは開催国の法令などに従って変更される場合があります。

セッションの間、選手にはコントローラと呼ばれる審判員が一人付き、選手の監視や魚の計測を行います。選手は抽選で選ばれたビートで3時間釣りをしますが、この時間内に許可無くビートの外に出ると失格になります。また、誰かからの道具の提供、チームキャプテン以外から釣りのアドバイスを受けた場合も失格になります。道具に関するルールが守られていれば、釣り方には特に決まった制限は無く、釣り場の状況に応じた選手の得意とする方法で釣りをすることができます。

魚の最小長は20cmで、これ未満の魚は有効な釣果とは認められません。ただし、最小長に関しては開催国の判断により変更することができます。

対象魚種は基本的に鱒(トラウト)ですが、これらも開催国の判断により追加、変更ができます。

スレ掛かりは有効な釣果として認められません。ただしエラ蓋のよりも鼻先側であれば、口の外側に掛かっているも有効な釣果として認められます。選手は、釣った魚のダメージを最小限に抑えるために、必ずランディングネットによって、且つ水面上で魚を取り込まなければなりません。陸上に引きずり上げたり、手で掴み取ったりする行為は禁止されています。

また、一度ネットに入れた魚に触れることもできません。

釣った魚は直ちにコントローラの元に運び、有効な釣果であることの判定と、大きさの計測を行ってもらいます。計測の前に死んでしまっている魚も有効な釣果として認められません。不正を防止するために、フックを外す行為や魚のリリースはコントローラによって行われません。

釣果に対する得点(Fishing Point:フィッシングポイントと呼ばれている)は、有効な魚1匹に対し100ポイント、さらに魚の大きさ1cm毎に20ポイントが与えられます。従って、20cmの魚を釣り上げた場合、 $100 + 20 \times 20 = 500$ ポイントとなります。

例えば、20cmの魚2匹の場合の得点は1000ポイントですが、40cmの魚1匹の場合の得点は900ポイントですので、魚の総全長が同じでも、魚の数が多い方が高得点となります。

大雑把ではありますが、以上がFIPS-Moucheが定めるフライ・フィッシングの競技大会の流れとルールです。

普段釣りを楽しんでいる皆様は、思い思いの自由な発想と自由な時間で釣りを楽しんでいることだと思います。その自由さが釣りの魅力の一つであることは確かですが、時間やルールに縛られた中で釣技を競い合うという釣り方にもいつもとは違った緊張感と高揚感が有ると思います。

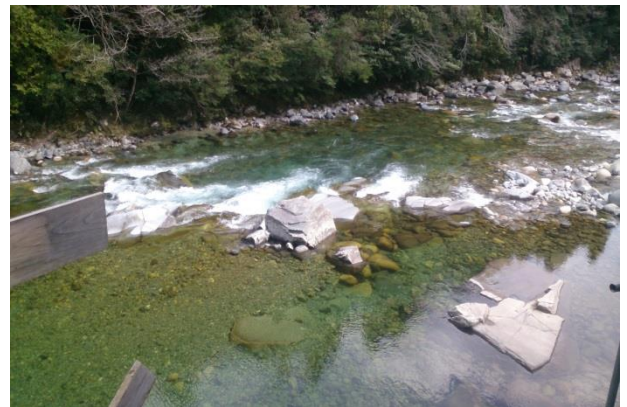
私自身も、2008年大会でチームジャパンの一員として参加し、貴重な経験をさせて頂けた一人です。

このような釣りの世界があることを少しでも多くの方にとって頂き、少しでもご興味を持って頂ければ幸いです。

付知川鮎旅

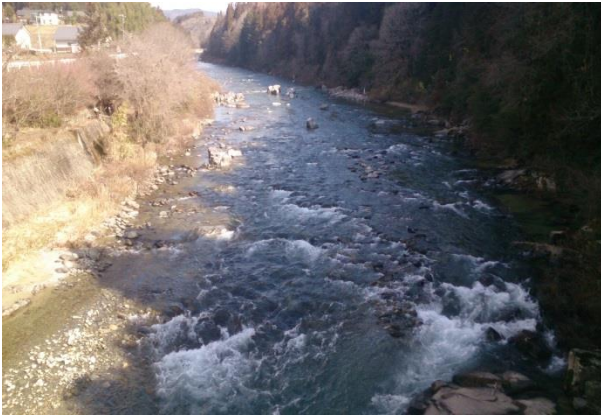
藤山 童溪

8月12日午前1時に始動。首都高西神田から入って中央高速道へ。SAで休憩しながら中津川ICを出たのが5時過ぎ。午前6時に恵那漁協のS氏と中流域の島田橋で落ち合う予定になっている。



今回は初めての付知川鮎釣りということで、事前調査を兼ねて7月に下呂～高山の旅の途中恵那漁協さんに立ち寄った際に「釣行時にはご案内致します」の申し出をありがたくお受けした次第(今年の3月に常滑、多治見を散策時に恵那漁協さんを訪ね色々と情報をお聞きし河川状況や宿泊宿までご紹介頂いた経緯あり)。



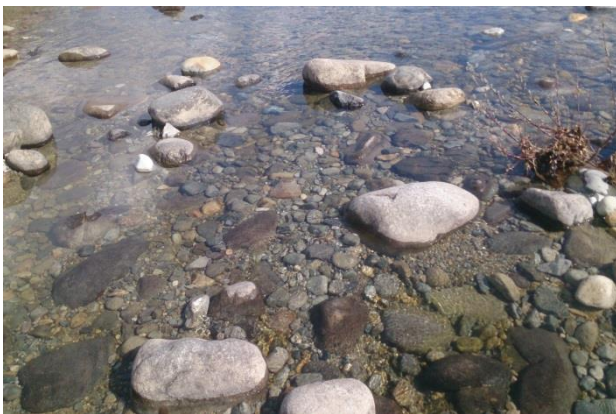


底石まではっきり見える透明な流れ、黒い大石にうっすらコケの付いているのが確認出来る。

6時に島田橋に着く。S氏は既に到着、入漁証まで用意して呉れていた。早速S氏馴染みのおとり屋さんへ向かう。上流の数か所を川見して我々に適した場所（老人向きの入川しやすい穏やかな流れ）に案内される。解禁から日も経っているので数は望めないが型は出来ているのが掛かるとの事。とにかく一荷物降ろして身支度を整え簡単朝食して・・・さあ竿出し、となる。



コンビニで朝食と昼食を仕入れ、島田橋まで朝日に輝く付知の流れを同行のTY、KK、MKに見て貰う。



川は穏やかに流れ、一瀬一人状態で静かな釣りが続く。時折竿をまげて鮎が掛かる。型は15～17cmだが、東京近郊のだらしない畜養鮎のアタリではなく、湖産らしいアタリで久し振りに興を感じる。あとでS氏に聞いたら湖産と言っても琵琶湖ではなく中津川系の湖で畜養した鮎とか。関東地方のそれとは違うのは、養殖方法（畜養容積比率とか泳流速等）が異なるのか河川慣生時期（放流されてからの期間）が長いためのなのか、所謂湖産の闘争心旺盛な鮎を彷彿させてくれる。都会近郊の河川の昨今は解禁時の成魚放流は当然で休日前の成魚放流も行われる）



夜立ちの疲れもあり11時過ぎに昼食休憩にする。S氏より手作りの辛子味噌大葉巻揚げの差し入れ、ビールに絶品、ピリ辛さと味噌揚げの香ばしさが疲れを癒してくれる。その後睡魔と闘いながら数

匹の引きを楽しんで今日はおしまい。S氏より明日の釣場所に案内して頂く。知らない川なのでピンポイントを教えて貰うのは心強い限り。

宿は料理宿、料理>宿泊で温泉宿、釣り専用宿ではなく明治から続く老舗和風旅館である。と言っても釣り支度を解くのに優しい対応をしてくれる。宿の詳細は別項とするが3泊しても朝晩同じものが出ない料理には「流石料理屋！」とリピートしたくなる「おもてなし」には温泉ナシを差し引いても満足満足。これも恵那漁協からの紹介のお陰？

翌日は前日の場所よりちょっと下流d大型が出るとの事。川の押しはやや強いが水明は変わらない。それにしても川岸には人的ゴミ、自然ゴミ（折枝、流木等）もほとんどないので根掛かりも少ない。今日も同行案内してくれたS氏の話ではシーズン前やイベント開催後には漁協主導で川掃除をするとか。源流部の渓谷には川遊び施設（キャンプ場等）が多い事、流程も長くないので観光課や恵那漁協（一川一漁協）の管理がいき届いていると推測される。釣人にとっても嬉しい環境である。

朝出掛けに道の駅「花街道付知」で買った弁当開いていたらG理事が五平餅や地トマトを差し入れて呉れる。まさか漁協の方針ではないだろうが3月に車を出して案内してくれたH参事をはじめ皆心配りの優しい方々、都会で殺伐な人間関係に慣れた身には釣り以前の心地良さを痛感する。

今日はおとりを道の駅近くで購入したが、昨日のおとりとは動きが違っていることをG理事に伝えたら、おとり屋さんによって仕入れ先が違うから、との事。

尤も我々は店でタモ入れされたのをそのまま受け取る横着買だからそのおとり選びに問題があるのだが。（昨日はS氏が選んでくれた） どうも我々は研究心が欠如しているらしくいつも釣果には恵まれない。それに典型的な横着釣り、今日も案内された場所からほとんど移動しないためだれもツ抜けをしない。KK君は大型が掛かってさんざん遊ばれた結果高切れ、その後もバラシ専門で、結果的には納竿時に曳舟に入っている鮎はすべてS氏の釣果であった。（つまり全部頂いたわけである）

三日目（最終日）はS氏の教わったちょっと遠いおとり屋で種鮎（当地ではおとりを親とか種と言う）を購入、但し昼食弁当（当然軽い飲み物も）は道の駅で、入川は勝手知ったる昨日と同様（どこへ行っても同じだから？）の場所、同じポジションに陣取る。今日も一人一瀬状態の釣り。おとりは元気だし土産確保の大漁を願うが・・・体力が残っていなかった。



今日はS氏は所用で同行はなし、G氏には今日も差し入れして頂く。アジメこしょうと言う飛騨地方の青唐辛子のようなものを細かく刻んで醤油+ α + β +etcに漬けた自家製の香辛料？（類似で例えるとオクラの刻みと食べるラー油とを混ぜたようなもの、ヤッコ豆腐やほかほか御飯に載せて食べるものらしい）だが、刻んだ1~2片を口にしたらクワアと口の中が火事になったようにメチャクチャ辛い！しかしそのあとすっきりさっぱり感になりもう一度手が出るような美味？と言うか妙味？いや魔味、ビールに合う、冷にも適、つまり酒類に相性の良い今まで味わったことのない代物。（翌朝G氏より瓶詰で4人分お土産に頂いた）

疲れもあったのかアルコールが進んだのかランチタイムが長くなり午後の釣りは鮎に見放され（毎度の事？）早目に撤収。

今年の鮎旅は釣果は別にして素晴らしい恵那漁協の方々と知り合い、付知川と言う里川でありながらごみのないそして透明度の高いきれいな流れに遊べたことがなんとも嬉しい。鮎と遊んだ、いや遊んで貰った付知川、来年も是非訪れたい川である。

ビワマス

鈴木 伸一

初めて訪れてから彼是8年ほど経ったであろうか？ 7月2日（土）～3日（日）にかけて、機会あって久々に琵琶湖釣行に出かけてきた。それも、梅雨の晴れ間とあって、絶好の釣り日和と踏んでいたので・・・

結果的には、大自然相手故、なかなかこちらの思惑通りにはいかず、ウグイの猛襲はあってもビワマスは群れが移動してしまったのか？ 魚探を頼りに湖北一帯を引いたもののその姿は滅多に見せてはくれなかった。

初日、少々早めに昼食をとり、その後、ダウンリガー仕掛けで漸く40cmオーバーを取り込み、タックルをセットし直した直後にまた当たりが！

ロッド・ホルダーから竿を手を取ったときには既にリリーサーから錘は外れており、今までのマスとはけた違いの重量感が。竿を立て、リールを巻こうとしたその瞬間、ラインは一気に引き出され、サミングのためスプールの上に載せていた親指は摩擦熱で皮がむけてしまうほど。

咄嗟のことで気が動転してしまったのであろう？ 普段使うことのないムーチング・リール、あわててスプールから指を浮かすも今度は高速逆回転したスピールのノブが指に当たってしまい痛いもの。その間僅かの時間であったと思うが、漸く気を取り戻し、マスと向き合い暫し引きに応じて根競べ。幸い上あごの基部に針掛かりしてくれたようで危なげなくネット・イン。



船上に上げてみると、体長60cm、



重量2.5kgのほんのり桜色を帯びた美しいピワマス♀。僕にとってはこの1匹で今回の釣行目的は達成されたも同然、十分過ぎるほどの充実感が！



帰宅した翌日、予め前日柵取りしておいた部位を刺身に、焼き物用にカットしておいた部位に塩コショウをし、フライパンにオリーブ・オイルを引きソテーに。この形容しがたい美味、正に釣り人冥利に尽きるというものである。

本来はキンキンに冷えたビールを飲みたいところではあったが、訳あってビールにはドクター・ストップが掛かっている。ここはじっと堪えて我慢我慢……

釣りの潮目

四条 徳明

十数年、医者と薬に縁のなかった釣友とボソボソ語った話です。

なぜか11月に突然口を開くのに痛みを感じるようになり、治療専念し一週間ほどして流動食から回復し始めても、外出は危険といわれて好きな釣り（船釣り）を禁止され約1か月、家でごろごろしていた時、自分はなぜ釣りに行くのか考えたそうです。見舞いに行った私も面白い話と共鳴し、約3時間以上も哲学的な話題に時間をつぶした話を思い返してみました。

まず一般論として、趣味の価値観は、一人一人違う。詰めてみれば誰しもが自分の価値感、言い換えれば時間×金銭の消費とそれによる心の豊かさで価値を判断しているのではないか。

観劇や音楽会は骨董茶碗のように保存性はなくとも、有名な演奏家の音楽会へ高いお金を出しても行くのは、それが高性能のコンボでCDを聞いたのと同じ音色であっても、劇場という場所、会場にく

る人々の雰囲気や酔い痺れる時間に価値を認めているのではないか。

泉澤 和行

お花見のころ弁慶塚や千鳥が淵のボートが混む。池のボートから見るお花見は視界に広がるサクラ並木ですが、土手を歩くと一本一本の木の表情が楽しめる。貸しボートは30分でも時間を余す価値だが、歩いている花見客は2～3時間楽しむことに価値を認めている。

釣りはどうか。初めて釣れた時の感激、そのうち量やサイズ狙いで達成感を味わうために釣り場、道具の性能の選択に時間も金銭も惜しみなく使うようになる。

中には対象魚や釣り場を固定してその釣りを極めるという人も多い。

自分は釣りにいくなら早朝一人で夜討ち朝駆けは当たり前、前日は準備万端、釣れた帰りは鼻歌交じりで帰ってきたものなのに、流動食になってからは、釣行にファイトがわからない。なぜか？以前はフッコのルアー釣りで、持って帰らない人がいて勿体ないと思っていたが、近ごろはフッコだけでなくアジ・サバ。イシモチ・ハナダイ・タチウオなど時にクーラー一杯釣って持ち帰っても、ご近所はサカナ丸ごと貰っても処理できないとか、鱗、頭、中骨などをゴミとして出すのに気が引けるとかで処理に困ることさえある。

潮目の替わり時か。二人とも生涯の趣味として楽しんできた釣りの仕方に歳相応の潮時が来たのではないか。

一日テレビ漬けでゴロゴロしているのは無駄な時間浪費で、かといって、池でフナや手長エビ釣りは趣味に合わない。これまで長年海で受けてきた視覚、聴覚、触覚、臭覚、新鮮な魚の味覚の五感刺激がボケ防止と足腰の運動になるのは間違いない。

夜討ち朝駆けはやめる。車は一人ではいけない。平日すいている乗合い洞の間、電動リールがあるからと言ってオモリは60号以下。クーラーは20Lまで。

これで周りから何かといわれても、食わせる時のタイミング合わせ、食わせた大物の竿さばき、新鮮な刺身や甘辛く仕上げた干物など未練が大きい釣りに熱中しつづけることができそうだ。

何はともあれ健康第一！

釣りのブログ

私は、2011年9月にフライ・フィッシングを主な題材にしたブログを立ち上げ、これまで5年以上続けています。三日坊主で終わることが多い私にしては珍しいことですが、平成28年12月31日現在で、アップ回数は1,915回、アクセス数は、155万回を超えました。自分の事ながらよく続いたものだと思いますが、始めた理由や記事の内容そして変化したこと等を記したいと思います。

まずブログを始めた理由ですが、そもそものきっかけは第2の職場に移って少し仕事に余裕が出たことから、その余裕を使って何か出来ないかというものでした。



ブログの題材をフライ・フィッシングにしたのは、これまで40年以上にわたっていろいろな釣りを経験してきた結果、フライ・フィッシングが一番面白いと感じているのですが、その割にフライ人口は極端に少ないと感じていたので、おこがましいのですが少しでも普及させたいと思ったものです。

最初は、タックル、釣り方の基本技術、毛ばりのタイイングの基礎等をアップしていましたが、最近はこちらに加え自らの釣行結果を記しています。その際、使用タックルや釣果等を出来るだけ詳細に記すようにしています。毛ばりも隠さずに載せるようにしています。やはり、参考にしてほしいとの思いからです。

また、ブログを始める際に私なりのルールを設けています。それは、自らも含めて実名は出さない、仕事のことは出さない、画像は了承のない限り顔を出さない、一方的な批判はしない等です。

ブログを開始してからの直接的な変化は、いくつかの釣り場で、もしかして、ブログをやっているかと問われることがあり、こうして知り合った方

が、増えてきたということです。私のブログがどのようにみられているかが分かって有り難い限りです。純粋に釣りだけのつながりのこうした出会いはブログの良さであります。また、いい加減なことは記せないということで、下調べしてから記事をアップする習慣が出来て釣りに関するより正確な知識が身に付いた気がしています。

一方で、悪い意味での変化もあります。それは寝不足です。ブログをアップするのに結構な時間を費やすからです。

こんな状況ですが、今暫く続けてみようかなと思っています。

因みに、私のブログの名称は「C級フライフィッシングの話。」でハンドルネームは「kazu53」です。冷やかし大歓迎ですので、興味のある方は検索してみてください。

お宝コーナー

長年釣りをやっているとならば傍目にはガラクタ同然のものであっても、当人にとっては愛おしいというか、何としてでも手に入れたくなるような、お宝的存在が少なからずあるのではないだろうか？



たまたま来シーズンの釣りを模索しながらネット検索していたところ、昔懐かしいガラス製のビンドウが目を惹き、一も二もなくとある方を通して手に入れてしまった（もちろん、これもお宝的存在）。

実は私事であるが孫娘が来年の夏には2歳を迎えることになり、そろそろ釣りと言うか魚捕りに目覚めさせたいと密かに画策しているところである。幼児向けフライ・フィッシング用タックルは既に確保済であるが、来年は少々時期尚早の感は否めない。と言うことで、まずは魚捕りに徹してみることにした。それも、魚に与えるダメージを最小限に抑える方法・手段で。

では、捕獲した魚は一旦は弱ることのないような容器に入れる必要があるのだが、先入観は殴り捨て、道具としても遊び心があるようなものはないものかとネットに目を向けてみると・・・

結構いろいろとあるようである。それも何故か新品よりはビンテージものが人気がるようで、価格もバカにならないどころか私と好みが共通している方が多いようでお目当てのものがそう易々とは手に入らないことも分かってきた。

以下に私の拙い目利きで確保できたブリキのバケツ達を紹介するので、それらから垣間見るお国柄と言ったものも感じとって頂ければ幸いである。

Galvanised Double Minnow/Fish Bucket (イギリス製)



Measures 10.5" at bottom length, 5.25" tall, and in absolutely terrific condition.

Hinged top. Nice tapered oval shape with turned wooden handle. (こんなブリキ細工が一番高額)

Galvanized Old Pal Minnow Bait Bucket for Stream Fishing (アメリカ製)



Stands about 7 1/2 inches high. The bucket and lid are galvanized. (小型で体裁よく、タナゴ用水箱としても利用可能)

Galvanised double minnow/fish/bait bucket
Nice neat size and oval shaped
Quite unusual
The inner bucket lifts out and has a hinge lid
Good condition
The oval is approx 24cm across (max)
and the bucket (excluding handles) is about 16cm (デザイン、機能、質感どれをとっても申し分なし)

Oval Tin ~ Minnow / Bait Bucket (フランス製)



Large and Beautiful Tin Minnow or Bait Bucket in oval form with nice wooden handle. c. 1920's

Empire City Bronzed Minnow Pail 100 Minnows Bait Bucket (アメリカ製)



Stands 9 1/4" tall x 9" wide
Bronzed Tin Pail
Inside is the pail 8 1/4" tall x 9 1/4" wide
(ネーミングからして小魚を100匹収容可能)

2016年度活動実績

日付	活動実績
04/24 (日)	平成28年度定期総会
05/15 (日)	親子マス釣り懇親会 マス釣り & BBQ
07/23 (土)	若洲シーサイドパークグループ、(公財)日釣振東京都支部主催 第12回若洲海浜公園親子釣り教室への参加 釣り指導サポート
08/21 (日)	第4回アウトドアフィッシングスクール in 若洲への参加 釣り指導・魚の捌き方サポート
08/21 (日)	全磯連関東支部主催女性・少年少女釣り大会への参加 荒天のため中止
10/03 (土)	ふるさと清掃運動会実行委員会主催ちよつといいこと「荒川でゴミ拾い」協力参加、及び模擬ルアー・キャスティング教室
10/16 (日)	「水辺感謝の日」清掃デーへの参加 多摩川是政橋近辺
10/23 (土)	若洲シーサイドパークグループ、(公財)日釣振東京都支部主催 第2回「初心者・ファミリー釣り教室」への参加 釣り指導サポート
11/01 (日)	みんなで遊ぼうフィッシング祭りへの参加 都合によりサポート中止
11/12 (土)	ヤマメ発眼卵埋設&稚魚放流 JOFI 西東京に協力参加
11/12~11/13 (土・日)	28年度全釣り協公認釣りインストラクター資格講習・試験 スタッフ・講師を派遣

05/22 (日)	渡良瀬川支流秋山川において
07/13 (水)	水産多面的機能対策発揮活動
09/17~18 (土、日)	
01/20~01/22 (金・土・日)	ジャパンフィッシングショウ2017への参加予定 ニジマス釣り等のサポート
01/31 (土)	釣りインストラクター・マスター研修会への参加予定
4月より毎月第2土曜日	若洲海浜公園釣り場における釣り場クリーンアップ、及び釣り指導

編集後記

今回は特に特集を組んだ訳ではありませんでしたが内水面に関する活動、釣り情報、釣りのルールなどに関したものが多く寄せられました。今後の勉強会などにも是非反映させていきたいと思っております。

本会報誌は皆様からの寄稿の様子を見て適宜特集を組んで発行していきたいと思っております。原稿は随時募集しておりますので、会員名簿を参照し広報部宛にEメール、又は郵送でお寄せください。勿論、集まり具合によっては期限を切って募集することもありますので、その際はどうぞよろしくお願いたします。(N. S.)

東京都釣りインストラクター連絡機構会報誌
第5号 (暫定版)

発行日 平成29年1月15日
発行 JOFI 東京
(一社) 全日本釣り団体協議会 公認
東京都釣りインストラクター連絡機構

編集 同上 (広報部)

URL <http://www.jofi-tokyo.org/>